

山本健吉著
池田彌三郎

萬葉百歌



中公新書

19



中公新書 19

日本財團支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

山本健吉^著
池田彌三郎

萬葉百歌

中央公論社刊

山本健吉 (やまもと・けんきち)

1907年(明治40年)に生まる。本名、石橋
貞吉、1931年、慶応義塾大学文学部国文学
科卒、文芸評論家、1988年5月、逝去。

池田彌三郎 (いけだ・やさぶろう)

1914年(大正3年)に生まる。1937年、慶
応義塾大学文学部国文学科卒、同大学文学
部教授、洗足学園魚津短期大学教授、文博。
専攻、国文学(古代)、芸能史、1982年7
月、逝去。

まんようひやくか
萬葉百歌

中公新書 19

©1963年

検印廃止

1963年8月26日初版

1998年6月25日48版

著者 山本健吉
池田彌三郎
発行者 笠松 巖

本文印刷 精興社
カバー印刷 大熊整美堂
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104-8320

東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3666

振替 00120-4-34

◇定価はカバーに表示してあ
ります。

◇落丁本・乱丁本はお手数で
すが小社販売部宛にお送り
ください。送料小社負担に
てお取り替えいたします。

Printed in Japan ISBN4-12-100019-6 C1292



大和三山 向って右から耳成山、
畝傍山、香久山。(撮影・入江泰吉)

序

山本健吉

何度読んでも読み飽きない日本の詩集としては、私は萬葉集と芭蕉七部集とを挙げる。読むたびに、何か新しい発見があるのだ。おそらくこの二冊は、日本人にとっていつまでも心の支えとなり、魂の故郷となるような詩集であろう。

だが萬葉集は、長く埋もれてその真価が見失われていた時代があった。その発掘作業は、まず契沖・真淵以下の江戸の国学者たちによって行われ、明治に入って子規によって、作歌上の模範とされるに至った。大正期になると、子規の流れを汲んだ赤彦・茂吉等のアララギ派の短歌運動の制覇によって、いわゆる萬葉調の短歌を作ることが風靡した。大正時代の末年に青年時代を過ごした私は、これらの先覚者たちの不断の啓蒙活動によって、萬葉集が急速に日本人の意識に広く深く滲み透って来ていた過程に、おのずから立会っていたわけである。

小倉百人一首式の優雅な歌が、つまり日本の歌というものだと思っていた私に取って、萬葉集を見出だしたことは大きな驚きであった。古代人の生活や自然のいぶきがそのまま籠っているよ

うなその新鮮な魅力の前に、私はしばらく心を投げ出していたと言ってもよい。それはあるいは、初めて縄文土偶に触れたときの驚きに似ているかも知れない。私はそのころ赤彦や茂吉の見方、考え方に共感しながら、人間の真情の素樸率直な現れ、流動的な強い声調となった感情の一途の集中を、そこに見ようとした。

もちろんこれは、私の世代の者の経験であって、その後の戦争期に、しきりに萬葉の精神を鼓舞された青年たちには、かえって萬葉に反感を抱く人たちもあったらしい。時代時代によって、違った受取り方をされるのは、古典の運命のようなもので、これは致し方のないことだし、現に共著者の池田氏と私とのあいだには数年の開きがあり、氏はまた私とは違った径路で萬葉に触れているはずである。

だが、池田氏と私とがこの共著を思い立ったのは、どちらも大学で折口博士の講義を聴いたという共通の地盤があったからである。アララギ流の考えの洗礼を受けていた私は、博士の講義には最初かなりな抵抗を感じた。だが次第に、それはそう考えなければならぬのだというのっぴきならぬ形で私に迫り、私を捉えたのである。

折口学の考え方の特色は、現代的な立場からの印象批評を避けて、文学作品の発想の「場」を説明しようとしたことである。発想とは単なる作者個人の意図・作因を意味せず、あらゆる空間的・時間的に働きかける外的要因を含み、それはしばしば一つの様式として作者の心意に働きか

ける。それは作品の発生の秘儀に立会おうとし、そのために作品の背景をなす萬葉びとの生活様式や生活感情を、可能なかぎり生き生きと再現しようとする。そのような見方は、アララギ流の鑑賞的な態度はもとより、国文学界の訓詁的な態度とも、激しく対立し合うものであった。

もし本書が、在来の類書といささかでも違ったところがあるとするれば、それは執筆した二人がそのような考え方を受継いでいるということである。その点で先師の名が随所に出てくるのは、止むをえないことである。

萬葉集と一口に言っても、実に多様な変化に富んでいる。一冊の歌集でありながら、そこには神々の薄明の時代から、近代の孤独の詩にまで達する、実に豊かな詩的経験が圧縮されている。私どもは巻頭の雄略天皇の牧歌的な求婚歌と、巻末の伴家持の憂愁の近代詩とを、同一の尺度で評価することはできない。そこには文学意識の発生以前から、高度に洗煉された文学意識に至るまでのさまざまな段階を含む。ここではそれを識別し、振り分けようとしながらも、そのすべてを包括しようとした。呪歌的・儀式的・民謡的な古式の歌の発想の場を解明すると同時に、黒人から家持に流れる近代人的・知識人的な発想の歌を暖かく豊かに理解しようとしてつとめた。それがどの程度に果されているかは、本書を読んで判断して頂くより外はない。

去年、柳田国男先生がなくなられて、その葬儀の帰りに、山本健吉、加藤守雄両氏と民俗学や国文学の将来などを語り合っているうちに、三人で萬葉集の輪講を始めようというような話が出た。三人とも慶応義塾大学の国文学科で、折口信夫先生の指導をうけた者（山本氏はずっと先輩であるが）であるから、師説から出発して、萬葉集について自由な考えを出してみよう、というようなつもりであった。ところがその計画が未発のうちに、中央公論社の出版局の探知するところとなって、こういう本へと話が進んで行った。三人の共著ではうるさすぎるし、山本氏と私との共同作業ということに落ち着いた。

本書は従って始めから単行本として出版する計画で進められた。しかし、仕事の進行途上で多少計画が推移して行った。そしてこういう形になった。始めは、「短歌百首」を選し、一首について、本書の見開き二頁に説明解釈等を納めるという、かなり形式的にきっちりした形のもの考えた。解釈も注釈に深入りせず、さらに、百首の一つ一つを足場にして、萬葉一般の知識を述べて、「萬葉百科」といったものをおかねようというつもりであった。この計画は、本書の私の担当した部分には面影をのこしていて、私の叙述は、長さの制限に内容の方を多少犠牲にした

ところがある。

萬葉集四千五百余首から百首を選び出す、ということとは、はなはだむずかしい。実は本書の仕事で一番楽しかったのは、その百首選出の仕事であった。山本氏はどうしても長歌をいれるという。そして、巻頭第一の「こもよ」を採択するという。私は、萬葉という「こもよみこもち」がまず必ず出て来る、それだからくたびれてしまふのだと言ひ張る。そんなことを言ひ合ひながら、一首一首きめていった。およそ「いい歌」を基準にしたが、中には、作者と作者とのつり合ひ、特殊性のある歌、触れておくべき説明の例歌として欲しい歌、そういった特殊性が、「いい歌」ということより多少重くみられているという基準が混用されている。しかし、百首にしほれば、どれをとり出してもまず「いい歌」であることにかわりはない。そうしてきめた百首について、まず私が書き、時にはこういう点にふれてくれと山本氏に注文をつけたりしてパトンを渡し、次に山本氏が書いた。その部分は文末に一々記名してある。

歌は作者別にまとめ、それを年代順に並べた。萬葉集を時間的に四期に分けることは今日常識となっており、本書もそれに従った。しかし、その各期の中での歌人の配列は、個人の生没による機械的な並べ方には、必ずしも従わなかった。第三期の歌人など、生没年月日にこだわりすぎた配列は、かえってこういう百首選のようなものには不向きだと思ったからである。また、大伴家持を最後に位置させたのなども、萬葉集と家持といった関係を考へての配慮である。歌の年代

順といっても、この程度のことでよかろうとしたのが、二人の一致した考えであった。

歌はすべて漢字まじりにした。漢字は、かなに対して意味を示しているつもりで、用法であって、いわば「ふり漢字」である。歌は、本文もふりがなも、すべて旧仮名遣いとした。また、枕詞は、ひらがな表記で次を一字あけ、というのを原則とした。歌の句読、一字あけは、私が担当した。この理由は、折口先生が、歌集『海やまのあひだ』の巻末に書いておられる。その原則を頭において、意味のうけとり方を容易に、かつ適確にするために、視覚的にはっきりさせる方法として採用した。切り方の原則、基準を私は一応もっているが、ここには述べない。よむ時には、こだわりなく五七五七七と切ってくればいい。

もう一つ、上代特殊仮名遣いというものがあって、それを絶対のものとするよみ方が、国語の教科書を通じて流布している。今後ますます普遍化するだろうが、それは、必ずしも絶対なものではあるまいとするのが私の考えであり、また、そうよんで来た長い歴史というものを、国語学的な成果でただちに捨て去るのも、まだそこまでの勇気を私は持ち切れない。そういう態度で表記をきめていっている。

目次

序

第一期 飛鳥時代（六二九—六八六）

あきのたの	ほのへにきらふ	(卷二・八〇)
こもよ	みこもち	(卷一・一)
ゆふされば	をぐらのやまに	(卷八・五二)
やまのはに	あぢむらさわぎ	(卷四・四六)
いはしろの	はままつがえを	(卷二・二四)
わたつみの	とよはたぐもに	(卷一・五)
にぎたづに	ふなのりせむと	(卷一・〇)
うまぎけ	みわのやま	(卷一・二七)
みわやまを	しかもかくすか	(卷一・一八)
あかねさす	むらさきのゆき	(卷一・三)

山本健吉
池田彌三郎

磐姫皇后	四
雄略天皇	六
舒明天皇	一三
齐明天皇	一五
有間皇子	一八
天智天皇	二一
額田王	二五
額田王	二八
額田王	二八
額田王	二八
額田王	三三

むらさきの にはへるいもを (巻一・三)
 かむなびの いはせのもりの (巻八・四九)
 われはもや やすみこえたり (巻二・五)

天武天皇 三三
 鏡王女 三六
 藤原鎌足 三九

第二期 藤原時代(六八七—七〇七)

はるすぎて なつきたるらし (巻一・六)
 ももづたふ いはれのいけに (巻三・四六)
 わがせこそ やまとへやると (巻二・〇五)
 うつそみの ひとなるわれや (巻二・六五)
 ますらをや かたこひせむと (巻二・二七)
 いにしへに こふるとりかも (巻二・二二)
 やすみしし わがおほきみ (巻一・四四)
 あきののに やどるたびびと (巻一・四〇)
 まくさかる あらのにはあれど (巻一・四三)
 ひむがしの のにかぎろひの (巻一・四四)
 ひなめしの みこのみことの (巻一・四九)
 しきたへの そでかへしきみ (巻二・二五)

持統天皇 四二
 大津皇子 四四
 大伯皇女 四七
 大伯皇女 四九
 舍人皇子 五二
 弓削皇子 五四
 柿本人麻呂 五七
 柿本人麻呂 五八
 柿本人麻呂 五八
 柿本人麻呂 五八
 柿本人麻呂 五八
 柿本人麻呂 五八
 柿本人麻呂 六四

ささのはは みやまもさやに (巻二・二三)
 あらたへの ふぢえのうらに (巻三・三五)
 あふみのうみ ゆふなみちどり (巻三・二六)
 たまぎぬの さるさゝしづみ (巻四・五三)
 あしびきの やまがはのせの (巻七・二八八)
 みけむかふ みなぶちやまの (巻九・七〇九)
 ひさかたの あめのかぐやま (巻十・八二二)
 はつせの ゆつきがしたに (巻十一・三五三)
 ますらをの おもひみだれて (巻十一・三五四)
 あさひてる さだのをかべに (巻二・二七)
 いにしへの ひとにわれあれや (巻一・三三)
 たびにして ものこほしきに (巻三・二七〇)
 わがふねは ひらのみなどに (巻三・二七四)
 いづくにか われはやどらむ (巻三・二七五)
 くるしくも ふりくるあめか (巻三・二六五)
 あしべゆく かものはがひに (巻一・六四)
 いはばしる たるみのうへの (巻八・四一八)

柿本人麻呂 六八
 柿本人麻呂 七一
 柿本人麻呂 七三
 柿本人麻呂 七六
 柿本人麻呂 七六
 柿本人麻呂 七八
 柿本人麻呂歌集 八〇
 柿本人麻呂歌集 八三
 柿本人麻呂歌集 八五
 柿本人麻呂歌集 八五
 日並皇子尊宮舍人等 八八
 高市黒人 九一
 高市黒人 九三
 高市黒人 九三
 高市黒人 九五
 高市黒人 九八
 長奥麻呂 一〇〇
 志貴皇子 一〇三
 志貴皇子 一〇五

うらさぶる	こころさまねし	(卷一・八二)	長田王	一〇七
はやひとの	さつまのせとを	(卷三・二四八)	長田王	一〇九
いほはらの	きよみがさきの	(卷三・二九六)	田口益人	一一一
うちなびき	はるきたるらし	(卷八・四三三)	尾張連	一一三
しきしまの	やまとのくにに	(卷十三・三三四)	作者不詳	一一五
ちちははに	しらせぬこゆる	(卷十三・三九六)	作者不詳	一一七
つくばねに	ゆきかもふらる	(卷十四・三三二)	東歌・常陸国歌	一二〇
つくばねの	ねろにかすみぬ	(卷十四・三六八)	東歌・常陸国歌	一二二
つくしなる	にほふこゆるに	(卷十四・三四七)	東歌・陸奥国歌	一二五
すずがねの	はゆまうまやの	(卷十四・三四九)	東歌・未勘国歌	一二七
いねつけば	かかるあがてを	(卷十四・三四九)	東歌・未勘国歌	一二九
こもちやま	わかかへるでの	(卷十四・三四九)	東歌・未勘国歌	一三一
かのころと	ねずやなりなむ	(卷十四・三六五)	東歌・未勘国歌	一三四
たちておもひ	ゐてもぞおもふ	(卷十一・三五〇)	作者不詳	一三六
しるしなき	こひをもするか	(卷十一・三九九)	作者不詳	一三八
ともしびの	かげにかがよふ	(卷十一・六四三)	作者不詳	一四一
たらちねの	ははがかふこの	(卷十二・二九九)	作者不詳	一四三

さひのくま ひのくまがはに (巻十二・三〇七)

むらさきは はひさすものぞ (巻十二・三〇二)

たらちねの ははのめすなは (巻十二・三〇三)

さきはひの いかなるひとか (巻七・二四二)

いまさらにも ゆきふらめやも (巻十・二八五)

かくのみに ありけるものを (巻十六・六〇四)

第三期 和銅・養老時代(七〇八―七二八)

たごのうらゆ うちいでてみれば (巻三・三三八)

いにしへの ふるきつつみは (巻三・三七八)

みよしのの きさやまのまの (巻六・九四)

ぬばたまの よのふけゆけば (巻六・九五)

くだらのの はぎのふるえに (巻八・二四二)

なみのうへゆ みゆるこじまの (巻八・二四四)

むかしみし きさのをがはを (巻三・三二六)

あなみにく さかしらをすと (巻三・三四四)

あわゆきの ほどろほどろに (巻八・二三九)

作者不詳 一四五

作者不詳 一四八

作者不詳 一四八

作者不詳 一五一

作者不詳 一五三

作者不詳 一五五

山部赤人 一六〇

山部赤人 一六二

山部赤人 一六五

山部赤人 一六八

山部赤人 一七〇

笠 金村 一七二

大伴旅人 一七四

大伴旅人 一七六

大伴旅人 一八〇

ますらをと おもへるわれや (巻六・六八)

おくららは いまはまからむ (巻三・三七)

あまさかる ひなにいつとせ (巻五・八〇)

すべもなく くるしくあれば (巻五・八九)

いへにても たゆたふいのち (巻十七・三九六)

うちひさす みやにゆくこを (巻四・三三)

ひさかたの あめのつゆじも (巻四・三二)

こひこひて あへるときだに (巻四・六一)

あをやまを よこぎるくもの (巻四・六八)

大伴旅人 一八二

山上憶良 一八四

山上憶良 一八七

山上憶良 一八九

大伴旅人の儼従 一九一

大伴宿奈麻呂 一九四

大伴坂上郎女 一九六

大伴坂上郎女 一九八

大伴坂上郎女 二〇〇

第四期 天平時代(七二九—七五二)

おほのうらの そのながはまに (巻八・六五)

わがせこと ふたりみませば (巻八・六六)

かづしかの ままのゐをみれば (巻九・八〇)

よしのなる なつみのかはの (巻三・三五)

かはづなく かむなびがはに (巻八・四三)

たびびとの やどりせむのに (巻九・七九)

聖武天皇 二〇四

光明皇后 二〇六

高橋虫麻呂 二〇八

湯原王 二一〇

厚見王 二一二

遣唐使人の母 二一五

われのみや よふねはこぐと (巻十五・三六四)

もみぢばの ちらふやまべゆ (巻十五・三七四)

あしびきの やまぢこえむと (巻十五・三七三)

わがせこが かへりきまさむ (巻十五・三七四)

ちりひぢの かずにもあらぬ (巻十五・三七七)

みづとりの たちのいそぎに (巻二十・四三三)

わすらむと のゆきやまゆき (巻二十・四三四)

みちのべの うまらのうれに (巻二十・四三五)

あがこまを やまのにはがし (巻二十・四一七)

遺新羅使人 二一八

玉 槻 二二〇

狭野茅上娘子 二二二

狭野茅上娘子 二二四

中臣宅守 二二七

有度部牛麻呂 二二九

商長首麻呂 二三一

天羽郡上丁丈部鳥 二三二

豊島郡上丁棕椅部荒虫の妻宇遲部黒女 二三四

いまはわは わびぞしにける (巻四・六四)

きみにこひ いたもすべなみ (巻四・五三)

あひおもはぬ ひとをおもふは (巻四・六八)

ひとつまつ いくよかへぬる (巻六・二四)

こもりのみ をればいぶせみ (巻八・四七)

はるまけて ものかなしきに (巻十九・四四)

あさとこに きけばはるけし (巻十九・四五)

紀 女郎 二三六

笠 女郎 二三八

笠 女郎 二四一

市原王 二四三

大伴家持 二四五

大伴家持 二四八

大伴家持 二五〇